

マザリング／母をする

— その息苦しくてごちゃごちゃした希望について

北村 文

日本の家族には、「母」がいなければならない。愛情深く、自己犠牲をいとわない「母」——「慈母」「賢母」の呪縛は、今も続く。さらにグローバリズムとネオリベラリズムの競争が母たちをも取り込み、就労して経済社会に貢献することを求める。性別役割分業はそのまま残るけれど、そこは自己責任で乗り越えよ、と。コロナ禍ではステイホームが唱えられ、それはすなわち「ホーム」を担わなければならない母の責任であった。背負わされるものが、あまりに大きすぎる。それらがなべて「母性／母であること (motherhood)」と呼ばれ、あたかも、女性たちの本質であるかのように期待される。息苦しい。

しかし母をやめるわけにはいかない。この赤ちゃんが死なないように、子どもが明日もまた目覚めて病気せずに過ごせるように、母たちは頭を悩ませ、手足を動かし、精いっぱい努力をする。うまくいかないこともある。また考え、また働く。注意深く、必死に、子どもと向き合い、知識や方法を蓄積していく。できれば明日も笑っていられるように、そしてこの子が生きていく世界が平和であるように (Sara Ruddick, *Maternal Thinking*)。

「マザリング／母をすること (mothering)」は、不安と絶望と喜びと希望が混乱し葛藤する、もうどうしようもない現実だ。それゆえに、母たちの実践はひとつではない。抑圧に打ちひしがれるときもあれば、規範から逸脱していくこともある。支え合い連帯し、声を上げることも。そこまではできなくても、ときに笑い、ときに泣き、母である——でもそれだけではない——自分を語っている。「母性」など、そもそもが無理な話なのだ、その中でも私たちは産み、育て、生きている、と (Adrienne Rich, *Of Woman Born*, Andrea O'Reilly, *Mother Outlaws*)。

日本の家族には、本当は、母がいることもいないこともある。複数いることもある。母はいろんなかたちで母をするし、母でない人が母をすることもあるだろう。「マザリング」の視座で、その豊かな現実を見つめ直したい。



PROFILE

きたむらあや：津田塾大学学芸学部准教授。専門は社会学、ジェンダー研究、日本研究。フェミニスト・エスノグラフィーの方法論から女性たちのアイデンティティやエイジェンシーを描きだす。著作に、『日本女性はどこにいるのか』（勁草書房、2009）、『英語は女を救うのか』（ちくま書房、2011）、『現代エスノグラフィー』（新曜社、2013）など。